

7月5日（日）主日礼拝レジュメ

『しかし』と言える人生　詩篇71篇14～16節

私たちの信仰生活にもこの「しかし」が必要。この詩篇の作者のように神を信じていても、敵と呼ぶべき存在があったり、命の危険の中に置かれることもあるが、私たちを支え、希望をもって主を仰ぐようにさせるのが、みことばによる祈り。私が聖書宣教会を卒業して赴任する時に与えられたみことば。

- ① 使徒の働き16章10節「パウロがこの幻を見たとき、私たちはただちに、マケドニアに渡ることにした。彼らに福音を宣べ伝えるために、神が私たちを召しておられるのだと確信したからである。」

祈りにより守られた確信が、何か問題が起こった時に、「しかし」と私たちに言わせて、目を主に向けさせ、平安のうちに主に祈りの手を上げさせ、まだ問題の解決を見る前から主への賛美が心にわいてくることを経験できる。この詩篇の作者も「しかし私は 絶えずあなたを待ち望み」と言う。まだ問題が解決しない中であっても、彼は主を待ち望むことを決心している。そして12節「わが神よ 急いで私を助けてください」と、神の助けを祈り求めている。そして、それは人が考えられないようなかたちでの主の助けを求めている。どうにもならない時に私たちの側の問題は、あきらめること。

「いよいよ切に あなたを賛美します」とあるように、神は常に賛美され、ほめたたえられるお方。

- ② 「賛美の聖書的な理解を求めて」津村俊夫師

「賛美とは一人の個人の日常生活の中で生まれてくるということ、賛美は自分が主に向かって讃美歌を歌うというよりも主が私たちに信仰

の賜物として与えてくださること、そして神をほめたたえとは、栄光と力を本来属しておられる方、主に帰するということです」

日常生活の中で賛美は生まれる、この詩篇の作者のように、敵と呼ばれる人たちに命を狙われる現実の中で、「見放さないでください」「見捨てないでください」と祈りたくなるような現実の中で、なお私たちは主を賛美する。そして「いよいよ切に あなたを賛美します」とありますが、この人が賛美しようと思ったり、賛美することを決心したというよりも、このような厳しい現実の中で、**神がこの人に賛美を授けられ**、それを言葉にして賛美をしたということ。

15節「私の口は絶えず語り告げます。あなたの義と救いを」とあるが、神の義は、敵を滅ぼすということに現れ、それがこの人の救いとなる。私たちはイエス・キリストの十字架の救いによる神の義と救いにあずかった者として、それを語り告げる。

16節で「私はあなたの力とともに行きます。」とあり、主の力の現れとしての主の救いのみわざとともに行くということ。「ただあなたの義だけを心に留めて」とあり、心に留めるとは、静かに思いめぐらすということで、そこから主への信仰や信頼が生まれる。

今年度も祈りつつ、主のみわざを告げ知らせてまいりたい。その中で、私たちは自分のためにも祈ることの必要と大切さをおぼえるべき。そこから主を待ち望む信仰、主を賛美する信仰が与えられることを願う。そして、主の義と救いを周りの人々に語り告げることが、主に対する私たちの証しとなっていくことを願いたい。